

文学博士平田 寛氏の『絵仏師の時代』に対する授賞

審査要旨

著者平田 寛氏は九大卒業後、約十年間、奈良文化財研究所に勤務、南都の諸寺院、殊に唐招提寺、西大寺等々の絵画を研究し、その成果を数多くの論文として発表してきた。その学問的基本態度は飽く迄も美術史学として、絵仏師を見てゆこうとするものであり、作品にやや恵まれているとはいへ、研究の多くを史料によらなければ完結できない絵仏師につき、能う限りの史料数百点にあたって実証した点は高く評価できる。古代中世の絵仏師についてのモノグラフは決して少なくはない。しかしながら深い美術史的配慮の下に行われた研究は皆無に近い。著者が每章、毎節に覗かせる美術史的考察は、本書の史料集成的意義と共に絵仏師の絵画史的地位を明瞭にし、ひいては日本に於ける絵仏師の存在意義を初めて明確にしたものとして特筆される。

本書は史料篇・研究篇（平成六年二月二十八日、中央公論美術出版刊行）の二本よりなる。史料篇は採訪した文献を、文意が通ずる範囲で一括して挙げ、研究篇は、大同三年（八〇八年）の画工司の改編から嘉暦三年（一三二八年）の海西人良詮の仏涅槃図制作にいたるまでの、五百余年にわたる我国絵画の動向を、六百有余の史料を以て確定し、その間の絵画の歴史的な変化を見定めようとするものである。なかでも、治暦四年（一〇六八年）の絵仏師教禪の僧綱補任より正中二年（一三二五年）の巨勢有久の東寺大仏師職補任にいたる二百五十余年、僧綱に補任された絵仏

師が絵画制作の中心となったことの歴史的経緯と、経緯にともなう絵画の変化を明らかにするものである。

上代の画工司を縮少継続した平安時代の画所（のちの絵所）も画師（絵師）は、絵仏師の僧綱補任とともに、絵画制作の主導性をうしなう。藤原道長・頼通父子による壮麗な仏画製作にともない、絵仏師は公事として巨大な仏画をえがき、僧綱位を得る。その画風も明快・壮大であったにちがいない。以後、僧綱絵仏師は制度としても成熟し、白河・鳥羽の院政期（一〇七二—一一五六年）に、切金・暈縷・具・色を用い、壮大明快とは別趣の、美麗で緻密な特色ある所謂平安仏画の世界をつくった。

十二世紀後半以後、後白河・後鳥羽の院政期、律令体制の弛緩とともに、絵仏師僧綱の制度は変質する。法印頼源以後、僧綱位世襲の傾向が生まれ、他方、南都の東大寺・興福寺の絵所座が成立し、その結果、僧綱位は絵所座大仏師職と化した。それにともない、巨勢派・宅間派のように、絵仏師の系譜は顕在化し、高僧と絵仏師の、狭いが強い精神的絆も明確となる。それらのことが、水墨画受容の過程で、絵画の画題と画風の多様性をもたらし、分裂をうみ、僧綱補任以来の一つの絵画史的伝統が終わる。

これら絵仏師の画法は、型の継承を基本とした。様（たしめ）・画様・絵様・紙形などと、時代によって名称を異にするが、その型は下図にもちいられ、願主と絵仏師の意見交換の場となり、制作の規範ともなり、絵画史上特色ある伝統をつくることとなった。

以上、絵仏師を特殊な一分野の存在に限定し、絵画史形成の補助的地位に置いてきた非を正し、十一世紀中頃から二百五十余年間、絵仏師が日本絵画史形成の中心となったことを明らかにした。著者が能う限りの史料に当り、作

品の現存しないものまで原初の形を推測して日本絵画史の欠失した部分を補完した業績は大きく、高く評価すべきものと考ええる。